

市長挨拶



直方市長
大塚 進弘

令和3（2021）年4月からスタートした、10年計画である「第6次直方市総合計画」では、まちづくりの最上位計画として「未来へつなぐ～ひと・まち・自然～」を都市将来像に掲げ、「ひと」「まち」「自然」のそれぞれの観点から都市将来像の実現に向けて、市民の皆さまと行政が協働し、まちづくりを進めてまいりました。

しかし、この間発生した新型コロナウイルス感染症により、社会経済は大きな打撃を受け、本市もその対応に追われました。ライフスタイルの変化はもとより少子化を加速させ、人口減少は予想以上に早く進んでいます。また、不安定な国際情勢の下、円安やエネルギー価格・食料品を中心とした物価高が市民生活と経済活動に深刻な影響を与えています。さらに、令和6（2024）年1月の能登半島地震や、気候変動の影響を受けた線状降水帯の頻発など、災害が激甚化する中、防災減災と国土強靱化の重要性が改めて高まる等、社会経済情勢が加速度的に変化しています。

加えて、ICT（情報通信技術）を中心に技術革新は目覚ましく、最近ではAIの進化により私たちの働き方や生活をも変えようとしています。このようなVUCA（ブーカ：先行き不透明で予測困難な状態）と言われる社会にあっても、市民の皆さまにこのまちに住み続けたいと思って頂ける持続可能なまちづくりを進めていくため、策定から5年目を迎える令和7（2025）年度に、総合計画の中間見直しを行いました。

中間見直しにあたっては、令和6（2024）年に実施した「市民意識調査」の結果を分析し、総合計画の基本計画に掲げる施策の見直しを行いました。引き続き「SDGs（持続可能な開発目標）」を市政の羅針盤としながら、デジタル技術の活用、官民連携や広域連携の推進、激甚化する自然災害に強い地域づくりを加速させます。また、施策の推進においては、新たにオープンした保健福祉センターを拠点とした健康づくりや新産業団地造成事業による産業のさらなる発展、

「花のまち」「蒸気機関車のまち」のブランドの確立といった新たな取り組みとともに、市民一人ひとりが心の豊かさや直方に住む喜びを実感できる「ウェルビーイング（幸福感）」の向上を最優先課題の一つとして掲げ、心の満足度も重視しながら将来に向けたまちづくりに取り組んでまいります。

5年後の令和13（2031）年には、いよいよ市制100周年という大きな節目を迎えます。今日私たちが受け継いできた豊かさを、より魅力的な形で次の世代へとつなぐため、この改訂された総合計画に基づき、市民の皆さまとともに力を合わせて様々な施策に取り組んでまいります。

市民の皆さまをはじめ関係各位の変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

